



Data

監督：三島有紀子
 原作：三上延
 出演：黒木華／野村周平／成田凌／夏帆／東出昌太

👁️👁️ みどころ

1980年代の“角川ブーム”では、横溝正史の金田一耕助シリーズをはじめとして、本と映画が大人気になったが、今や若者は完全に本離れ！そんな中、三上延の“日本中から愛される文芸ミステリー”が累計640万部を突破したが、そのミステリー性は？犯人や探偵たちの知的レベルは？

米国では J.D. サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』をテーマにした『ライ麦畑で出会ったら』（15年）が、日本では、夏目漱石の『それから』と太宰治の『晩年』をテーマにした本作が“同時公開”されたのも何かの縁。この際、それらの文芸作品を紐解きながら、本作を楽しみたい。

もっとも、ビブリア古書堂の女主人の知的レベルには感服だが、野村周平扮する、活字が苦手な今どきの若者のバカさ加減には、いい加減ウンザリ・・・。



■□■今ドキ“古書堂”が舞台に！古書堂はどんな経営を？■□■

ビブリア古書堂は、今年6月に私が45年ぶりに観光した鎌倉の片隅にあるらしい。私は中高校生時代には故郷・松山市の古本屋によく通っていたが、ビブリア古書堂は古本屋ではなく古書堂というだけあって、場所もいいし、かなり高級そう。しかし、お客はほとんどいない。今どきのお気楽な若者（？）が、祖母絹子の死亡後その愛蔵書だった夏目漱石全集の中の『それから』を持ってビブリア古書堂を訪れても、店主の篠川栗子（しおりこ）（黒木華）はお昼寝中だ。これで古書堂はやっつけていけるの？

また、ひょんな縁からこの古書堂でバイトを始めた五浦大輔（野村周平）に対して、栗子の妹の篠川文香（桃果）が言うところでは、ビブリア古書堂に置いてある最高に高い値段の古書は太宰治の初版本で、著者の直筆メッセージもある『晩年』らしいが、それでも

その相場は300～350万程度。そんな情勢の中、今ドキの古本屋（古書堂）はどうやって経営を継続しているの？

■□■『それから』と『晩年』vs『ライ麦畑でつかまえて』■□■

若者の本離れ現象がひどいのは、日本も米国も同じ。そんな時代状況の中、米国で『ライ麦畑で出会ったら』（18年）が公開され、日本で本作が公開されたのは偶然？それとも、本屋の巻き返し策の一環？

J・D・サリンジャー作の『ライ麦畑でつかまえて』は、いうまでもなく20世紀アメリカ文学を代表する青春小説の金字塔。ちなみに、1951年に刊行された同書は、私が大学に入学した1967年度の英語のテキストに使われていた（英題は『The Catcher in the Rye』）から、その中で16歳の主人公ホールデン・コールフィールドが頻繁に使っていた“sonuvabitch (son of a bitch) (サノバビッチ)”＝（この野郎！こん畜生！くそつれ！という意味）という口汚い単語を私は今でもよく覚えている。映画『ライ麦畑で出会ったら』はジェームズ・サドウィズ監督のデビュー作だが、その主人公は、思春期に同小説で大きな影響を受けた同監督の分身？そう思わざるを得ない映画らしい。

それに対して、三上延の大ヒットシリーズである「ビブリアシリーズ」を映画化した本作では、夏目漱石の『それから』と太宰治の『晩年』がテーマになっているので、それに注目。とは言っても、この両作は、『ライ麦畑でつかまえて』よりはずっと昔の小説だから、三島有紀子監督は、現代を生きる若者・大輔と、ビブリア古書堂の女経営者・葉子を主人公にした“現代バージョン”と、『晩年』の主人公・田中嘉雄（東出昌大）が、食堂のおかみさんで人妻の五浦絹子（夏帆）に恋をする“昔バージョン”を交差させる形で、今ビブリア古書堂に起きる“ある騒動”を描いている。そのため、本作のタイトルは『ビブリア古書堂の事件手帖』とされており、“ある騒動”が事件手帖の内容になる。

しかし、横溝正史の“金田一耕介シリーズ”等の本格的“探偵もの”に比べると、本作のミステリー性はイマイチ。まして、今ドキの若者は、本の持ち運びのバイトはできても、ハッキリ言って謎解きや犯人捜しという“知的作業”は全然ダメだから、そこにミステリーの面白さを求めてもムリ。そのマイナス分を、本好きで知識豊富な葉子の推理力と、『日々是好日』で故・樹木希林の後継候補 No.1 になった演技派女優黒木華の演技力でどこまで補えるかが勝負だが、さて・・・？

■□■文芸ミステリーの犯人の狙いは？そのレベルは？■□■

私が小学生時代に夢中になったミステリー小説は「少年探偵団」「明智小五郎」「怪盗ルパン」etc.。それらが面白かったのは、犯人捜しのミステリー性がうまく仕込まれていたことその他、犯人側と探偵側双方の知的レベルの高さだ。そしてそれは、1980年代に角川映画で大ヒットした横溝正史の金田一耕介シリーズも同じだった。ところが、シリーズ合計640万部を突破し、“日本中から愛される文芸ミステリー”と呼ばれている三上延の「ビブリア古書堂の事件手帖」における犯人側と探偵側の知的レベルは？その魅力は？

本好きの葉子が恋愛に疎いのは当然だが、本の話題になるといくらでもしゃべるから、葉子と同じように本の好きな男ならそれなりにうまく付き合えるはず。本作でそう思える男は、古書の交換会で知り合ったマンガ専門のネット販売を行っている稲垣（成田凌）だ。明るさいっぱいの大輔ほどハンサムではないが、顔も悪くないし、本の知識は葉子に匹敵しているから、この2人なら、かなりお似合い。少なくとも、自分で活字を読めず、葉子から『それから』を読んでもらっているレベルの大輔に比べれば、よほどマシ・・・？

誰でもそう思うはずだが、本作における文芸ミステリーのテーマは、『晩年』をめぐるもの。『晩年』の直筆メッセージ入り初版本は時価で300～350万円するそうだが、近年何者からそれを「売ってくれ！」という“要求”がしきりに舞い込んでいた。葉子が「売る気はない」と回答すると、要求は次第にエスカレートし、「俺に渡せ。渡さなければひどい目に遭わせるぞ」と脅迫状態に。こうなれば葉子は警察に相談すべきだが、葉子はそれを親切だが何の解決能力もない大輔に相談したため、本作後半に見る“大事件”が発生することに。もっとも、犯人が誰かはミエミエだし、事件といってもただの脅迫・・・？今どきの人気シリーズにおける“文芸ミステリー”の犯人はこの程度・・・？

■作家志望の若者と人妻との悲恋は？■

2015年のNHK大河ドラマ『花燃ゆ』では久坂玄端を演じ、『聖の青春』（16年）（『シネマ39』35頁）章平では羽生善治名人を演じた東出昌大が、本作では太宰治の『晩年』にあこがれ、“作家になりたい”と夢見る若者・田中嘉雄役を演じている。あの時代にそんなことを思うのは良家のお坊ちゃま、と相場が決まっている。案の定、スクリーンを見ると嘉男はそれで、良家のお嬢様との見合いを薦められていたが、それを断り続けて作家への夢を募らせていた。

そんな嘉雄がある日一人でぶらりと食堂に入り、女将・絹子（夏帆）の「うちのおすすめはかつ井です」の言葉どおり、かつ井を注文すると、かつ井のうえには福神漬が。そこで嘉雄が「こりゃ、何？」という態度を示すと、絹子は「福神漬は苦手ですか？」と言いながら、それを橋で取り上げ自分の手の平へ。そして「女将さん」と呼ばれると、手の平の福神漬をポンと口の中に入れながら次の仕事へ。その手際の良さに嘉雄はビックリするとともに、それによって絹子に一目惚れしてしまったらしい。なるほど、青春時代にはこんなことはよくあること・・・？絹子に一目惚れした嘉雄は、その後食堂に通いながら次々と絹子に面白い小説を読ませたが、そのメインは太宰治。とりわけ『晩年』についての説明は詳しいし、「自信モチ生きヨ 生キトシ生クルモノ スベテ コレ 罪ノ子ナレバ」のフレーズの解説は絹子には刺激的だった。

もっとも、ある日、店に帰ってきた亭主に出くわしたことによって、絹子が人妻であったことを知った嘉雄は大ショックを受けたが、何故絹子は人妻であることを嘉雄に黙っていたの？その時点では、嘉雄は絹子への思いを断ち切れなくなっていたし、絹子も嘉雄からのアプローチに心が揺れ動いていくことに・・・。

五味川純平の原作を山本薩夫監督が映画化した『戦争と人間』三部作（70. 71. 73年）（『シネマ5』173頁）では、北大路欣也扮する東京帝大生が佐久間良子扮する五代財閥の跡取りの人妻に恋をする中で“姦通罪”の問題にまで浮上していたが、さあ『晩年』を巡る、この文学青年嘉雄と人妻絹子との悲恋の行方は・・・。

■□■福神漬から梅干しへの変更はいつ?■□■

本作冒頭は、絹子ばあちゃんのお葬式のシーン。それに続いて、大輔が子供の頃、絹子ばあちゃんが大切に保管している夏目漱石全集に手を出したため、ばあちゃんから二発も殴られるシーンが登場する。今ならこんな体罰はもつてのほかだし、ばあちゃんも今ではそれを反省していた。また、大人になった大輔は、子供の頃に受けたそんな体罰を素直に受け入れているらしい。それはそれでいいのだが、本作では一人息子らしい大輔の父親の姿が見えず、母親と絹子ばあちゃんしかいないが、それは一体なぜ？

他方、五浦家は小さな食堂経営しているが、そこでの名物は絹子ばあちゃんが作るかつ丼。大輔もよく食べていたそのかつ丼は、カツの上に梅干しが載っているのが特徴だ。冒頭でのそんなシーンを見ていたのに、本作中盤で登場する、嘉雄が食べたかつ丼に福神漬が載っていたのは一体なぜ？いつから、かつの上に乗せる具材が福神漬から梅干しに変わったの？また、それはなぜ？こんなシーンについて原作がどう書かれているのか私は知らないが、私が三島有紀子監督に感心させられるのは、そんなシーンをうまくストーリーのポイントとして使っていることだ。

前述した文学青年嘉雄と人妻絹子との恋は“かけ落ち”の約束(?)まで進むが、そこで絹子に妊娠の症状が見えてくると、さらに悩みが深くなってくる。そんな事態の収拾に大きく寄与したのは、絹子の夫の懐の大きさと優しさだったから、結局あの恋は実らなかったの・・・？そして、そんなことがかつ丼のかつの上のせる具材が、福神漬から梅干しに変わった理由なの？それはよくわからないが、本作ラスト近くにはそんなミステリーの謎解き(?)も登場するので、それにも注目！そしてまた、そんな三島有紀子監督の繊細な演出にも注目！

■□■遺品の整理はいつやるべき?■□■

私は2017年2月に102歳で死亡した父親の遺品整理をしなければならない立場になった。しかし、一つ一つの遺品のチェックはとても無理。そのため、結局すべて廃棄物にしてしまったが、本作に見る大輔は、絹子ばあちゃんが大切にしていた夏目漱石全集だけは棄てられなかったらしい。ちょっとさわっただけで可愛い孫に平手打ちを食らわせてしまうほど絹子ばあちゃんが怒ったのは、よほどの事情があるはず。そう考えた大輔は、何らかのヒントを探るべく『それから』を持ってビブリア古書堂を訪れた。つまり、『それから』に書かれていた田中嘉雄と夏目漱石のサインの真贋の鑑定を依頼したわけだ。すると葉子は即座にその真贋を見抜いたばかりか、絹子ばあちゃんの悲恋物語の可能性まで大輔に示唆。そんな伏線の上に、前述した葉子が祖父から受け継いだという、太宰治の『晩年』

の初版本との意外な繋がりが文芸ミステリーの核になっていくわけだ。

そう考えると、大輔が私のように絹子ばあちゃんの死亡と共に夏目漱石全集を廃棄物として処分していれば、本作のストーリー（ミステリー）は生じなかったことになる。すると、もし私が父親の遺品を大輔のように慎重に考えて廃棄していなければ、ひょっとして父親のかつての悲恋物語が浮上していたかも……。

2018（平成

30）年11月8日記